

岡義武著「明治政治史(下)(全2冊)」岩波文庫、岩波書店2019年3月15日刊を読む

I. 帝国建設の進展と政党勢力の上昇

1. 大正政変の頃から第一次山本内閣瓦解にいたる時期にかけて評論界あるいは政界では「大正維新」または「第二維新」という言葉が好んで用いられた。
2. それは政治の刷新を強く期待する意味で用いられたものであり、主眼点は藩閥勢力の打破、立憲政の原則確立にあった。
3. そして、右の時期を特徴づけたものは、群衆が街頭に登場して、政治の方向を左右しようと試みたことであろう。
4. 曾つて日露戦争の終りにポーツマス講和条約の内容に対する人心の大きな不満を背景として、大規模な騒擾が東京を始め全国諸地に勃発をみたのであった。
5. ところが、その後大正初頭以来上述のように群衆が政治的要求を揚げてしばしば街頭に姿を現わすことになった。
6. そのことは、国民の間に政治への関心が徐々に顕在化していることをある程度は示したものでいえよう。

P429

II. 通史を読み継ぐこと

伏見岳人

1. (1) 岡義武は、戦後日本において最も体系的な政治史を、複数の通史執筆を通じて作り上げた。
(2) 近代日本政治史の領域では、この度、岩波文庫に収録される『明治政治史(上)・(下)』および『転換期の明治』の3冊が、これから読み継がれる古典になることだろう。
(3) また、対をなす近代ヨーロッパ政治史の通史も、『岡義武著昨秋 第8巻』(岩波書店、1993年)に収められており、それらを包含する『国際政治史』もすでに多くの読者の手に届いている。
(4) 研究の専門分化が進んだ現在では、これらの複数領域を一人で束ねあげることがほぼ不可能に近い。
(5) そこに80歳を超えた段階でなお挑んでいた著者の情熱には、ただ驚嘆するしかない。
2. (1) 岡が近代日本通史の完成に奮闘した動機の一つは、後進への道標を築き上げようとする強い責任感だったのではないだろうか。
(2) 彼は、自らが学問の道を歩みだした最初期に、吉野作造からの指導として、まず体系的な通史を通読し、そこから関心を持った各論を掘り下げていくように助言を受けたことを、後進にたびたび語り継いでいた。
(3) この教えに導かれたものは、同じように岡の通史をまず手に取り、その継受を通して自らの学問的テーマを紡ぎあげていったのであろう。
(4) 肉体的な限界を受け入れつつ、精神的な熟成を信じて、近代日本政治史の完結に向かって

進み続けた岡の気高い姿は、同じく体系的な日本政治史の通史完成を夢見た晩年の吉野にも重なって映る。

(5) 未完の通史が絶筆になることは、政治史家としては本望だったと言えるのかもしれない。

3. (1) そして、明治国家を支える人心や気運を描いた岡の通史は、狭義の研究者のみならず、広く一般読者に読み継がれる価値を有している。
- (2) 対外的な危機感が、他者への優越感を秘めた誇負に転化することの根強さと恐ろしさは、すでに克服された過去の一幕にすぎないなどとは決して言い切れまい。
- (3) 本書の執筆は、戦後日本がバブル経済を謳歌し、日米経済摩擦に直面し、近隣諸国との歴史認識問題が噴出し始めた昭和後期に主になされた。
- (4) その後の平成日本の苦難の軌跡は、民族的誇負の問題について考える意義をますます増大させているように思われる。
- (5) そこに、西洋やアジアとの比較の視点を交えて、近代日本の政治史を学ぶことの最大の価値と魅力がある。

P453～454

<コメント>

1. 東京大学法学部で行われた、岡先生の幕末から戦後までを対象とする「近代日本政治史」の講義をゆっくり聴講させて頂くつもりで、本書上・下2巻を読ませて頂いた。
 2. 下巻最後のページからの引用は、大正デモクラシーの足音が少しずつ聞こえる「大正維新」といわれる「大正政変」についての、岡先生の穏やかな記述。
 3. 伏見先生による「通史を読み継ぐこと」の大切さのご指摘は、岡先生の本著上・下2巻で痛切に実感した。
 - ・「まず体系的な通史を通読し、そこから関心を持った各論を掘り下げていく」（岡先生の恩師である吉野作造先生の教え）
 - ・「岡先生の通史をまず手に取り、その継受を通して自らの学問的テーマを紡ぎあげていった」（岡先生の教え子の基本的態度）
- ご自身の経験に基づいた岡先生の教え、学問的態度は有難い。

2019年4月14日(日) 林明夫